

全国漢文教育学会 第38回（通算68回）大会のご案内

- 期 日** 令和5（2023）年6月3日（土）・4日（日）
- 会 場** 横浜国立大学（横浜市保土ヶ谷区常盤台79-1）
大会準備会代表 高芝麻子准教授
- 開催形態** 対面・リモート併用のハイブリッド形式
*但し、研究授業はリモート参加はできません。
- 参加費** 会員 1,000円 一般 2,000円 学生 1,000円 *リモート参加も同額。
研究授業のみ参加 500円（資料代として、会員・一般・学生共通）
- 申込方法** 同封の「払込取扱票」を利用し、5月26日（金）までにお申し込みください。
*リモート参加の場合は、参加料払込を確認の上、入室を許可します。
ZoomURLは、前日までに本学会ホームページに掲載します。

- 日 程**
- 第一日** 研究授業、研究協議、全国理事・評議員会
研究授業 10:45～11:35
会場 神奈川学園中学・高等学校（横浜市神奈川区沢渡18）
担当 塚原詩織教諭
学年・教材 中学1年「故事成語」
使用教科書 東京書籍「新しい国語1」
研究協議 11:50～12:50
会場 神奈川学園中学・高等学校 視聴覚室
全国理事・評議員会 15:00～16:30
会場 横浜国立大学 教育学部講義棟6号館（S3-1）6-102教室
- 第二日** 研究発表、総会
開会式 9:45～9:55
会場 横浜国立大学 教育学部講義棟6号館（S3-1）6-102教室
*以下、総会まで同教室。
研究発表 小中高の部 10:00～12:00
昼食（各自） 12:00～13:00
研究発表 大学の部 13:00～15:00
総会 15:10～16:00
閉会式 16:05～16:15

- その他**
- 1 新型コロナウイルスの感染動向により、開催形態の変更があり得ます。その場合は、本学会ホームページで告知します。
 - 2 史跡研修・講演会・懇親会は行いません。
 - 3 第二日の昼食は各自ご用意ください。学内の食堂は営業していません。会場から学内コンビニまでは距離があります。
 - 4 第二日は会場内に出版社が出店します。
出店予定社名（4月22日現在、五十音順）
亜東書店 研文社 大修館書店 東方書店 明治書院

研究発表要旨

【小中高の部】

郷土の漢文を教材化する ―淡路の漢詩人 中田南洋―

岡本利昭（神戸大学附属中等教育学校）

江戸時代後期に、阿波藩の支配下にあった洲本学問所の教官であった中田南洋の文学作品は、著作・掛軸などの美術品として、少なくない数が今も残されている。しかしながら、図書館や美術館に残された、その作品のほとんどが、漢詩・漢文であるため難解であると受けとられてあまり読まれていない。また、読解されていない作品も多い。

江戸時代の淡路の文芸・美術は担い手となる人材の層の厚さに驚かされるが、これには洲本学問所が果たした役割も大きい。洲本学問所の教官として地域に大きな影響を与えた中田南洋が、今後も永く地域に記憶される端緒となるように、淡路島のいくつかの中学校で南洋の詩文を漢文教材として活用した実践と共に、中田南洋の人と文学を紹介し、報告したい。

現代文化を通して漢詩を身近に感じる授業

田中 怜（横浜市立今宿中学校）

「漢詩の授業」というと、どうしても返り点や内容理解に終始してしまいがちである。学習者も内容を「覚える」ことで学びを止めてしまい、そこから自分自身との関連付けなどの発展的に考えることは少ない。発表者自身、これまでは漢詩の基礎を「教える」授業ばかりで、学習者の主体性を生かした漢詩の授業づくりに対して課題意識をもっていた。

今回はこの課題に対して、学習者が知る現代作品（主にポップス）の歌詞と漢詩を組み合わせることで、内容理解を深めつつ、漢詩が身近に感じられる授業についての実践報告を行なう。発表者は事前にアンケートを実施し、学習者が良く知る「現代ポップス」の歌詞を調査することで、学習者が積極的に活動に参加しやすいような環境づくりをした。その土台の基で行った、学習者が「漢詩」を自分やポップスと関連付け、ICTを活用したグループワークの中でそれらを他者に発信し、「言葉」について考えられるような漢詩学習への取組に言及したい。

探究する漢文 ―「先づ隗より始めよ」を教材に―

宮田滉大（神奈川県立西湘高等学校）

「古典探究」の指導事項「古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して、我が国の言語文化について自分の考えを広げたり、深めたりすること」を目標とした授業実践報告を行う。故事「先づ隗より始めよ」について、『十八史略』をベースに『戦国策』、『史記』と読み比べを行いそれぞれのテキストの特徴について評価する活動を通して、思考力、判断力、表現力を育むことを狙いとする。

具体的な手立てとして、読み比べの際にはジグソー法を用いる。『十八史略』を教材に「先づ隗より始めよ」の内容を理解したあと、『戦国策』と『史記』を読み比べする二つのグループに分かれ、『十八史略』との違いをまとめてから、互いにその違いを説明し合うことで「伝え合う力」を高めたい。テキストによる内容の違いを確認したあと、それぞれのテキストに関して説明した文章を読み、それらの違いが生じる理由を考察することで、生徒の考えを深めたい。

【大学の部】

明代の都市杭州を描いた紀行文について

一策彦周良『入明記』と中国文人による日記との比較を中心に―

植松宏之（二松學舎大学）

杭州は交通の要衝に位置する都会として繁栄し、都市と隣り合う湖の西湖は風光明媚な景観によって良く知られている。都市と自然の美しさを兼備する杭州は古来多くの文人墨客が行き来し、日本からも留学僧や外交使節が訪れた。そうした日本人による旅日記の一つに室町時代、明に渡った禅僧策彦周良による『策彦入明記』がある。杭州滞在の際には西湖や周囲の寺院に関心を示すほか、市街の様子についても店舗や看板等を詳細に記録している。一方、同時代（明朝）の中国人も杭州についての紀行文を数多く綴っているが、それらの描写の中心は西湖などの自然景観にあり、都市の中にはあまり関心を向けていない。

本発表では『策彦入明記』における杭州の描写と中国の文人による紀行文との比較を通して、杭州における都市と自然への関心の表し方の相異について考えて行きたい。

漢文資料におけるアナログとデジタルの融合 ―その作成と利用と―

篠原 泰彦（國學院大學）

漢文訓読を扱う資料の作成と利用は、デジタルとの相性が良くない。

デジタルで漢文訓読を扱う資料を作成するには、入力 of 難しい文字、文字化け、返り点の入力とそのため of 煩雑な操作など、課題が多い。また、デジタル化されたものは持ち運びが容易、適切に作成すれば検索が容易、などの利点がある一方で、液晶画面を見続けることによるドライアイや、アナログに比べて一覽性に乏しいという問題もある。

漢文訓読法のデータ化という視点からのデジタル化には先行研究があるが、眼前のデジタル資料作成に直結するものではない。

本発表では、アナログとデジタルを組み合わせ、効率的に資料を作成・利用する方法について、実践を踏まえて報告する。

鴻門之会再読 ―「読む」を考える試みとして―

渡邊 大（文教大学）

発表者は勤務校（文学部中国語中国文学科）二年次の選択必修科目「中国古典学講義Ⅱ」で鴻門之会を取り上げている。

高校の定番教材をあえて扱うのは、読むことを楽しむとともに、読むことについて考え、研究について理解を深めるのに、鴻門之会は格好の素材であると考えてのことである。

授業では、登場人物の言動から心情を読み取り、人物像を固めていくという読みの基本から、対称性、重層性といった観点による構造の理解、作品と作者・読者の関係、素材・事実の問題、また、形式のもつ意味、注釈や先行研究の利用など、読むことにまつわる諸々について、学生とともに楽しみながら考えている。

書かれていることから何を読み取るのか、問いを立て、仮説を掲げ、検証していくこと、小さな疑問を大きな問題に繋げていくことなど、好悪・善悪・優劣といった見方から離れて、研究の視座を獲得するための発表者の試みを報告し大方の指教を仰ぎたい。